岐阜薬科大学いまむかし

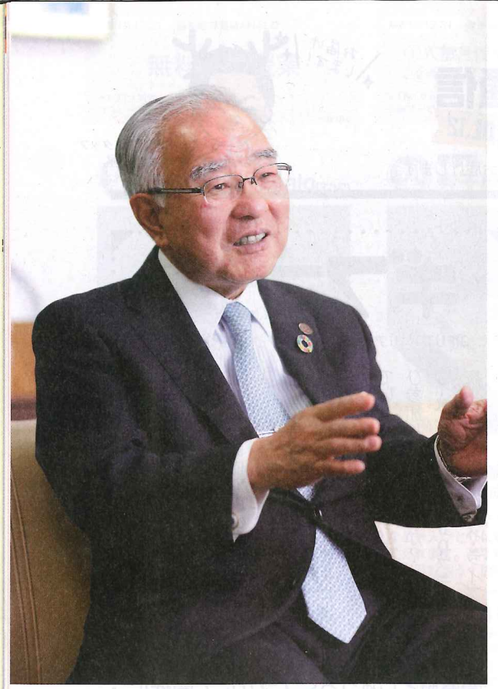
岐阜からはばたけ！日本の薬学を支える人づくり

岐阜市の公立大学である岐阜薬科大学は、令和9年に現在の2キャンパスを一つにする計画を進めている。超高齢社会で薬剤師の需要が高まる昨今、新たな薬の開発と、研究者や薬剤師の育成に努める地域の薬科大学のいまを、稲垣隆司学長に尋ねた。

製薬発祥の地に設立した全国初の公立薬科大学

奈良時代に成立した歴史書『日本書紀』。そこに書かれる、天武天皇が美濃国で薬をつくらせた記述から、岐阜は「製薬発祥の地」といわれている。そんな岐阜の地で日本の薬学の振興を進め、国民保健衛生の普及向上と化学工業の発展に寄与するため、当時の岐阜市長、松尾国松氏の発議で岐阜薬学専門学校がつくられた。創立は昭和7年。市立の薬学校として全国に先駆けたものである。

最初の校舎は九重町3丁目に設けられ、激動の昭和初期に日本の人材育成を支えた。昭和24年、学制改革に伴い、岐阜薬科大学として新たに発足。学生の薬学への探求をより深めるため、4年後には大学院（修士課程）を、昭和40年には博士課程を設置した。同年10月には三田洞キャンパスへ移転。平成22年には三田洞キャンパスの一部を大学西の本部キャンパスに移転した。さらに、8年後の令和9年を目標に、三田洞キャンパスをすべて本部キャンパス周辺に移転する予定だ。老朽化が進む三田洞キャンパスから移り、より薬学の発展に寄与するために環境を整備していく。



岐阜薬科大学　稲垣隆司学長

まちづくりから大学学長へ経験を生かして大学改革

岐阜薬科大学が重視するのは薬学研究。その方向性は創立から変わらず、大学院開設は東京大学や京都大学と並び、国内で最も早かった。開発した新薬も、これまでに6を数える。

平成27年から大学長を務める稲垣隆司学長も、研究を第一とする思いは変わらない。優しい表情で「学生たちには研究者になりなさい。薬剤師になりたいなら、まずはじめは病院の薬剤師になりなさいと伝えています」と話す。病院ではがん専門薬剤師など、情報を更新し続けなければならない。その言葉にあるのは、常に学ぶ姿勢を保ち続けて欲しいという願いだ。

稲垣学長は、岐阜薬科大学出身者で愛知県庁に入庁、環境部長、副知事として地域行政に関わってきた。その後、株式会社名古屋競馬代表取締役社長、名古屋学院大学理事長を経て、岐阜薬科大学長に就任するという風変わりな経歴を持つ。

「私が学生だった頃は、公害が大きな問題でした。大垣の付近など、昔は『白い公害』と呼ばれるほど、粉塵がひどかったんです。こうした問題を、薬学の知識を生かして解決したいと考え、大学卒業後に国立公衆衛生院（現 国立保健医療科学院）に入りました」。その思いから、薬剤師ではなく県庁職員としてまちづくりを進めてきた。まちの環境を整備して得た経験を買われ、学長に就任してから求められたのは大学の改革だった。

平成18年に薬学部を6年制にする制度がはじまり、これまでの4年制を卒業しただけでは薬剤師国家資格の受験資格を得られなくなった。岐阜薬科大学では、現在も6年制の薬学科と4年制の薬科学科が併設されている。薬科学科卒業生は、大学院で2年間修士課程を経てから、薬剤師資格取得のために再び大学に戻らなければならなくなった。「そんな学生たちの負担を少しでも軽減したい。学びやすい環境にするのが私の役目でした」と稲垣学長は振り返る。

学生の声を取り入れより薬学に集中できる環境へ

学びの環境を整えるために行った大きな取り組みが、三田洞キャンパスの移転事業だ。手狭になった研究室の拡張や、移動時間の短縮などのため、キャンパスを一つにする必要があった。そのための予算の確保など、岐阜市とともに道を整え、昨年ようやく決定に漕ぎつけた。また、研究費の獲得も成果の一つ。公立大学である岐阜薬科大学は、国立大学とは異なり、文部科学省からの補助金ではなく、総務省の地方交付税から予算が下りる。学び、研究する場として、より良い大学にしていくために、潤沢な研究費の獲得は不可欠だった。

薬学に打ち込めるようにと、学生の要望に応えて復活した学食

さらに、学長と学生との距離感も以前とは大きく変わっている。学生たちは、先生に直接相談しづらい場合もある。そう考えた稲垣学長は、学長に直接要望を出せるサジェッションボックスを設置したり、学生たちを集めて気軽に意見交換できる場を設けたりした。「気軽に挨拶してくれる学生も増えましたね」と顔をほころばせる。そんな学生を思う気持ちから食堂も復活させた。学業に、研究に集中できる環境が、着実に整いつつある。

「薬剤師は患者に薬を説明し、指導する健康サポートの役割が大切。そのためには知識はもちろんですが、コミュニケーション能力も磨かなければなりません。キャンパスを一つにし、1年生から6年生までが同じ学舎で過ごす環境を整え、コミュニケーションに長けた薬剤師を育成する。そうして薬学の発展に尽くしていきたい。また、創立時の松尾市長の思いを大切に、公開講座などで広く薬学の知識を伝え、市民の健康に貢献していきたいですね」

松尾市長からはじまり、歴代の学長が、研究者や学生たちが築き上げてきた岐阜薬科大学。「製薬発祥の地」の薬科大学は、今後も先人の魂を受け継ぎながら、ますます充実した学び舎へ発展していくのだろう。

稲垣学長と岐阜薬科大学の学歌。学歌の作詞は詩人の北原白秋

三田洞キャンパスは昭和40年に開設された

岐阜薬科大学本部キャンパス。令和9年に、校舎を拡張し、三田洞キャンパスと統合する予定